

基礎演習 I アンケート分析

Analysis of a Questionnaire about the Freshman Seminar 1

岡 田 真理子

Mariko OKADA

Abstract

This paper analyses responses to a questionnaire completed in July, 2010. The results of the questionnaire show the importance of the Freshman Seminar 1. But the contents of the responses vary in their details. We therefore need to create opportunities for accumulating common knowledge.

はじめに

和歌山大学経済学部において開講されている基礎演習 I（旧・基礎演習）は開講形態および講義内容を基準とすると3つの期間に区分することができる。第一期が2002（平成14）年度から2005（平成17）年度の制度が導入された時期、第二期が2006（平成18）年度から2009（平成21）年度の基礎演習が事実上必修化された時期、第三期が2010（平成22）年度以降の基礎演習 I と基礎演習 II の1年生前期・後期において初年度教育が整えられた時期である。本稿では第一期、第二期と制度的発展を経て第三期に入った基礎演習 I について2010年度に行った教員アンケート⁽¹⁾の結果を分析し、基礎演習 I が講義として抱える特徴と問題点を明らかにする。

前述のように、和歌山大学経済学部において、2002年度から基礎演習という講義名で大学1年生に関する初年度教育が実施された。2002年度から2005年度までの第一期は、基礎科目の1つとして開講され、初年度導入教育としての学部内位置づけはあった。しかし、各担当教員がシラバスを作成し、講義目的に関する認識は学部のなかでも複数に分かれている状況であったといえる。2006年度から2009年度の第二期は、2006年度の履修手引に「履修モデル」が記載され、履修モデルの中に基礎演習が組み込まれたことによって基礎演習が事実上必修化されたことが第一期との大きな違いといえる。さらに翌2007年度には、「基礎演習」という講義名を「基礎演習 I」と改称し、基礎演習 I には学部内統一シラバスが作成さ

(1) 学期末のご多忙な最中、アンケートにご協力いただいた全教員に記して感謝申し上げます。

れた。これによって、基礎演習 I は大学における初年度導入教育として学部生全員が履修する体型が整ったといえる。さらに、「基礎演習」を「基礎演習 I」と改称したことに伴って、大学 1 年生の後期に「基礎演習 II」⁽²⁾が開講されることになった。

本稿で分析対象としているアンケートは、上述した基礎演習の変遷のなかで最終部分にあたる 2010 年に実施した。つまり、和歌山大学経済学部における初年度導入教育が「基礎演習 II」と併せて本格的に制度化され、開始された年度に実施されたアンケート分析となっている。よって、本稿の分析は「基礎演習」の試行が終了し制度化されたという意味においては初年度導入教育のひとつの完成形に関する分析であるといえるが、「基礎演習 I」と「基礎演習 II」を組み合わせたカリキュラムが開始された年度に実施したアンケート分析であるという意味においては初年度導入教育本格実施の入口段階における分析であるともいえる。いずれにしても大学における初年度導入教育のひとつの転換点において行われたアンケート分析であり、また、アンケート実施時期が教育において持つ意味が両義的であるという点をまずはじめに留意しておく。

1. アンケート概要

アンケートは既述のとおり、2010 年度前期の基礎演習 I が終了した 7 月末に、基礎演習 I 担当者（20 名）を対象に実施した。アンケート項目は 3 つに分かれており、第一問は「基礎演習 I に関して 14 回の内容を記入してください」と授業内容を記述式で回答する内容となっている。第二問は「演習時間外に課した課題を挙げてください（できれば課題を課した狙いとともに）」となっており、授業時間外に実施した教育内容を記述式で回答するものである。第三問は「基礎演習 I を行う際に、最も重要視した点を挙げてください」として、基礎演習 I という初年度導入教育を担当する教員が教育を実際に行う際の主眼点や着目点について記述式で回答する内容となっている。

いずれのアンケート項目も基礎演習 I で各教員が実施した教育内容を具体的に記述式で回答することを要求するようになっている。そのため、アンケートに回答する基礎演習 I 担当者の記憶ができるだけ新鮮な期間内にアンケートを実施する必要があった。そこで、アンケート実施時期を 7 月末とし、アンケート回答期間も 2 週間とした。次節で見るように、実施時期に考慮した結果、回答内容は具体性に富むものとなった。その点においてはアンケート実施は効果があったといえる。しかし、前期期末試験期間と重なる 7 月末にアンケートを短期間で実施したことにより、アンケート回答数は 15 という結果となった。アンケート対象者が基礎演習 I の全担当者である 20 人と少人数であることから、アンケートの全数回収を目

(2) 基礎演習 II は 2010 年度以前にも開講科目として存在していたが、開講数が限られていた。、2010 年度は 1 年生後期に全学部生が履修可能となった最初の年度であり、全学部生に前期・後期継続して初年度導入教育が実施可能となった。

指していたことを考えると多少の反省点はあるが、回答率75%であることから、アンケート分析結果には支障ないものとする。

2. アンケート分析結果

2-1 授業内容

第一問目の授業内容に関する回答から見ていく。

和歌山大学経済学部では、1年生前期に行われる基礎演習Ⅰ(旧・基礎演習)の最初部分を利用して、新入生向けのガイダンスおよび「私の学びのデザインシート」を用いた導入教育が行われている。そのため、全14回のうち、初回は全教員がガイダンスを行い、2回目以降の2～3回程度を用いて「私の学びのデザインシート」を用いた自己紹介が行われる傾向が見られた。つまり、大学入学後、4月の1か月間をかけて新入生は高校までとは異なる「大学という場」に慣れる機会が与えられていることになる。ガイダンスにおいて大学生活を送るにあたって最低限把握しておくべき場所や事柄を周知し、「私の学びのデザインシート」を用いた自己紹介と「コメントシート」による学生間のフィードバックによって新しい人間関係を構築しつつ、プレゼンテーション能力の基礎を作るという導入教育におけるまさに入口の教育が約1か月かけて行われることとなる。この約1か月間は、アカデミックな教育という要素は薄いかもしれないが、アカデミックな教育への道筋を全学部生に提供するという意味において重要性が高いと考えられる。また、そのような重要性を基礎演習Ⅰ担当教員のほとんどが認識し、実施しているという点が評価すべきポイントである。

残り授業回数10～11回を、多くの担当教員が「個人報告」と「グループ報告」を組み合わせる構成で授業を行っている。個人報告では「新聞記事」を用いた報告を行っているケースが多くみられた。しかし、新聞記事を用いて「どのような」報告スタイルあるいは内容を学生に課しているのかという詳細な点まではアンケート結果からは判明しなかった。この点は今後のアンケート実施における課題と言える。現時点における予想としては、新聞記事を用いるという共通点はあるものの、各担当教員が行っている授業の内実は千差万別であることが考えられる。その観点からも、今後のアンケート実施の際に個人報告を学生に行わせる際の詳細な指導内容が分かるように設問設計をし、分析を行うことが求められる。

詳細までは不明なものの、個人報告を行わせる際の各担当教員の共通目的として、「レジュメ作成」と「プレゼンテーション能力」を学生に身につけさせることが主目的となっていることがうかがえる。他に共通に存在する目的としては、「社会問題に関心をもちさせる」または「検索能力を身につける」などがあった。以上から、基礎演習Ⅰにおいて個人報告を行わせる際には、「新聞記事を題材に報告資料を準備させ、実際に報告させる」という指導が多くの場合行われていることが考えられる。

グループ報告については個人報告のアンケート結果以上に内実が見えにくいアンケート回

答結果となった。個人報告ほど強い傾向として見えるわけではないが、共通してみられる特徴は「時事問題を題材に」するというケースが多くみられた。この回答傾向から、グループ報告は個人報告と同様にタイムリーな社会問題に関心を持たせて検索能力や報告準備能力、報告能力などを形成させることを主目的としていることが考えられる。ただし、個人報告では見られなかった指導上の問題点がグループ報告に関するアンケート回答からは見られた。それは、「題材選定（テーマや教材）に関する教員の負担が大きい」というものである。個人報告のように新聞記事という形で題材が限定して選定できないために、教員の授業準備や指導により負担が生じてくるものと思われる。題材にテキスト（新書等）を選定しているケースも存在した。⁽³⁾

2-2 課外に課す課題

第二問目の授業時間外に実施した教育内容に関する回答を見ていく。

最も多く見られたのは、基礎演習Ⅰの授業内容に伴う予習の課題であった。「私の学びのデザインシート」作成から始まり、報告レジュメの準備やグループワークに伴う作業などが挙げられる。この回答内容から、基礎演習Ⅰを実施する際には、学生には授業に単に参加するだけでなく、より主体的あるいは能動的に参加させるために各教員が課題を課す形で指導を行っていることが分かる。

他に多く見られるのは、新書を用いた書評レポートの作成など、基礎演習Ⅰの授業時間内に行われている授業内容とは別の課題として課されるレポートであった。ただし、レポート作成・提出後のフィードバックの方法や実施の有無などについては不明であった。授業内容とは別に課外に課す課題の効果を分析するためには、フィードバックのあり方を含めた詳細な内容を調査する必要がある、これらは今後の課題である。

2-3 基礎演習Ⅰ実施の際の主眼点

第三問目の基礎演習Ⅰという授業を実施していく際に各担当教員が重要視したポイントに関する回答を見ていく。

第三問目に関する各担当教員の回答内容はアンケート全三問のなかでもっともバラエティに富む内容となっていた。それらをあえて共通項目を探すことに重点をおいて分析すると、多くの担当教員が基礎演習Ⅰを実施していくなかで、学生に「コミュニケーション能力」を身につけてほしいと考えていることが見えてくる。各担当教員が「コミュニケーション能力」と指摘する時に考えられている能力の内容を分析すると、「問題発見」（自分で興味を持つ）能力と「報告」（他人に伝える、そのために準備する）能力および「議論」（他人が伝えたこ

(3) この場合、基礎演習Ⅱとの整合性が問題となる可能性がある。

とを共有する)能力の三つが存在すると思われる。これらはいずれも専門演習(ゼミナール)においては基本的に必要とされる能力であり、基礎演習Ⅰは初年度導入教育において専門演習につながっていくような能力形成がなされるべき場であると多くの教員が考えていることが分かる。その意味において基礎演習Ⅰという科目は、大学教育において重要なポジションを占めていると考えられる。

一方で、基礎演習Ⅰにおいて重要視するポイントを「コミュニケーション能力」のような専門演習につながっていく学問的能力とは全く別のところに置いている回答も少なからずみられた。そのような回答を大きくまとめてみると、「大学生活に『慣れる』こと」を基礎演習Ⅰの主な目的としていると考えられる。大学という場合は高校までとは学生にとって環境がまったく異なるため、「お友達づくり」や「通学の『くせ』をつける」ための場として基礎演習Ⅰを位置付けるという考え方である。基礎演習Ⅰが大学における初年度導入教育として存在していることを考えると、基礎演習Ⅰにこのような役割を担わせることもまた、専門教育へとつながる能力を形成することと同様に重要であると考えられる。

以上から、基礎演習Ⅰという科目は、大学教育の「入口」として多義的に重要性が高い科目であるとの認識が担当教員にあることが考えられる。

おわりに

以上見てきたように、基礎演習Ⅰは大学教育において重要な位置づけをもっている科目であるにも関わらず、その内実は一定の共通性はあるものの詳細はかなり異なっていることが予想される。基礎演習Ⅰに関しては「初年度導入教育としてなすべきことが不明なため、共通テキストを作成してほしい」という要望の声もあるが、新聞記事の活用方法ひとつとっても多様である現状を考えると実現は困難である可能性が高い。

しかしながら、現状をそのままにしておいては、基礎演習Ⅰを担当する教員も指導される学生も明確な方向性がないままになり、デメリットが大きい。そこで、共通テキストに代わる措置として次のようなことを提案したい。それは、今回実施したようなアンケートを毎年度実施することによりデータを蓄積し、基礎演習Ⅰという科目を実施していくために必要な要素を明確にしていくという作業を継続することである。例えば、「コミュニケーション能力」という言葉ひとつとっても、そこに含まれる重要なポイントはいくつかの要素に分解できるものと考えられる。アンケートによって得られた蓄積データをもとに、基礎演習Ⅰで養成すべき能力を具体的に抽出して再構成していくという作業が重要になってくる。さらに、その結果得られた基礎演習Ⅰを実施する際のノウハウや重要ポイントを情報共有できる場を定期的に設定することである。このような作業を継続して重ねていくことによって、初年度導入教育としての基礎演習Ⅰがとるべき方向性がゆるやかに明確になってくるものと考えられる。

